

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成25年 6月20日現在

機関番号：37301

研究種目：基盤研究（C）

研究期間：2010～2012

課題番号：22560651

研究課題名（和文） わが国と周辺地域におけるキリスト教会建築の展開過程に関する研究

研究課題名（英文） Study on the architectural development process of Christian Church buildings in Japan and neighboring countries

研究代表者

林 一馬（HAYASHI KAZUMA）

長崎総合科学大学・環境・建築学部・教授

研究者番号：80086420

研究成果の概要（和文）：標記の研究課題に対して、研究期間中計5回の海外現地調査を実施し、併せて関連する資料及び既往研究の調査・分析を行った。その結果、わが国と周辺地域におけるキリスト教会建築の導入及び展開の過程については、いくつかの主要系譜の並行的もしくは継時的な現象として把握できるという一定の見通しを得ることができた。しかし同時に、これを完全に立証するには、より精細な調査を必要とすることも明らかになった。

研究成果の概要（英文）：Within a fixed period of this study I tried to do 5 times on-the-spot investigation for different foreign districts, and also to analyze into the related documents or the past main papers. As a result, a definite prospect of this problem was gained, that will be explained the introduction and development process of Christian Church buildings in Japan and neighboring countries were a parallel or serial phenomenon which consists several architectural genealogy. But, at the same time, it was cleared that more minute research is necessary to prove this hypothesis perfectly.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
2010年度	1,400,000	420,000	1,820,000
2011年度	900,000	270,000	1,170,000
2012年度	500,000	150,000	650,000
年度			
年度			
総計	2,800,000	840,000	3,640,000

研究分野：工学

科研費の分科・細目：建築学・建築史・意匠

キーワード：キリスト教会堂 様式展開 東アジア地域 比較技術史 設計図面

1. 研究開始当初の背景

(1)本研究の研究代表者は、2006～2008年度に科学研究費補助金（基盤研究(C)、課題番号：18560638、課題名「わが国のキリスト教会の導入過程に関する比較技術史的研究」を得て、当該研究を本格的に開始した。この研究の過程では、17世紀後半以降、わが国及び東アジア諸国におけるキリスト教の布教をローマ・カトリック法王庁から公

認されていたパリ外国宣教会の本部（在フランス・パリ市）を訪問調査し、その古文書館において、わが国のキリスト教会堂の代表例であり、かつ現存最古の遺構として著名な国宝・大浦天主堂の創建時設計図面3葉が所蔵されていることを発見するなど、相応の成果を上げることができた。

しかしこうした創建当初の設計図面がパリ本部に残されているのは大浦天主堂に限

られた特殊事情によるもので、少なくとも国内に建設された教会堂では他に全く例がないことも同時に確認していた。

(2)一方、この研究を進める過程で、わが国のみならず東シナ以北の東アジア諸国におけるキリスト教・カトリックの再布教を主導したパリ外国宣教会、そしてプロテスタント系の諸派は、その各地においてどのように教会堂建設を進めてきたのか、またその結果として形成された同時代の東アジア地域におけるキリスト教会建築の総体は、建築史的にみるとどのような展開過程を示すのか、こうした問題については未だほとんど研究が進んでおらず、学的な解明は十分になされていないことが明らかになってきた。

2. 研究の目的

(1)本研究は、上記した 2006～2008 年度の科学研究費補助金による研究の成果を引き継ぎ、それを発展させることを主要な目的とする。すなわち第一に、すでに得られた成果自体にもとづく応用的な研究の推進で、これは主として現存遺構の再調査や関連資料の発掘等によって、より実証的な帰結を得ることをめざすものである。

(2)第二には、研究の対象領域を地理的に拡充する方向で、より包括的な視点から新規な課題を設定し、これに挑戦しようとするものである。すなわちここでは、研究対象を日本国内に限定せず、まずは作業仮説的な第一段階としてはあるが、パリ外国宣教会が布教の対象として担っていた東アジア地域を設定し、この区域内における同時代的な教会建設の動向を把握し、その様態を建築史的ないしは比較技術史的に解明しようという新たな意図を設定したものであった。

3. 研究の方法

上記した研究目的の 2 側面のうち、前者についてはそこにも記したとおり、現存遺構の再調査や新資料の発掘等を通してより高い実証性を構築するという、いわば通常の建築史的方法に拠った。

一方、後者については、既往の関連調査や研究情報等に依拠した現存遺構の所在確認とその中での重要遺構の選定、およびそれに関する現地調査の実施、他方でそれに関する資料の探索および近年の研究成果等の文献的調査というこの二つの方法を、車の両輪として位置づけた。

後者に関する現地調査としては、同時代的なキリスト教会建築の源流をなすヨーロッパ地域においては、2011 年度にオランダ (アムステルダム)・イギリス (ロンドン、オックスフォード、テトベリー)・フランス (パリ)、2012 年度にフランス (パリ市内及び周辺部) の計 2 回を実施することができた。他

方、キリスト教会建築の展開領域として指定した東アジア地域については、研究者自身のこれまでの調査で未踏査であった地区の中から選定し、2011 年度に中国の北京・天津両市、台湾 (台北、台南、高雄の各都市およびその周辺)、韓国 (ソウル、全州、大邱の各都市およびその近郊) の計 3 回を実施することができた。

4. 研究成果

(1)前回の科研費補助金による研究成果にもとづく継続的な研究としては、大浦天主堂の現存遺構をより精細に再調査することにした。

その結果、一つには、屋根裏の小屋組に残存していた当初の大梁材上面に、創建時天主堂の正面中央に聳えていた巨大な八角形鐘塔の背面柱 2 本が立っていた圧痕を新たに見出すことができた。つまりこれによって、創建時天主堂が現存遺構に実際に継承されていたことと共に、創建時天主堂の正面側の位置自体を確定しえたのであった。裏返して言えば、創建時の設計図面がまさにその通りに実現されており、その史料価値が高いことを改めて確認することができたというわけである。

一方、堂内においては、身廊部奥の主祭壇前面の柱において、旧聖体拝領台の架木を挿入していた痕跡 (埋め木痕) を発見することができた。これは、上とは別の史料として得られていた大正末～昭和初期頃の写真絵葉書に写る聖体拝領台の旧位置を実証するもので、かつ創建時の設計図面と比較すると当初からの聖体拝領台の位置を確定しえたことになる。

つまりこれらのことを総合した結果、大浦天主堂の創建時形態を初めて実証的に究明しえたわけであり、同時に現存遺構における創建時天主堂の位置および残存部分を確定したことになる。この成果の概要は、後掲の発表論文(2011)に示したところである。

なお、本研究の期間外 (直前) ではあるが、大浦天主堂の境内に残る歴史的遺構の一つである旧羅典神学校 (明治 8 年竣工、ド・ロ神父設計、国指定重要文化財) についても、創建時の設計図面 (各階平面図、計 4 枚) がド・ロ神父ゆかりの遺品中から発見された。よってこれを紹介するとともに、記載内容及び現存遺構との比較について建築史的な考察を加えた論考を 2010 年 3 月に発表した。研究課題に密接に関連するところゆえ、付言しておくことにした。

さらにもう一点付言すると、研究期間直後において、先に言及したパリ外国宣教会本部古文書館所蔵の創建時大浦天主堂設計図面に関して、その図面製作者等に関する重要な情報を含む資料が新しく公開されるに至っ

た。この点に関しては、研究者自身の今後の継続的な研究課題としたい。

(2)他方の東アジア地域における同時代的なキリスト教会建築の展開過程に関する研究については、数度に及ぶ現地調査を実施したものの、未だ体系的な結論を呈示できる段階には至っていない。残念ながらこのことを正直に告白しなければならない。その主たる理由は次の2点である。すなわち第一に、仮設的な見解はいくつか構想できるが、それを実証するに足る同時代的な史料を見出しえなかったこと、第二に東アジア地区のうち特に中国における教会建築の実態が、国土の広さや研究蓄積の浅さもあって十分に見通せる状態には到達していないこと、である。

それゆえ、この点に関しては何ら新規の研究成果を公表するに至っていないので、以下には研究期間中に抱いていた概括的な見通し、ないしは現時点で考量する仮説的な見解の概要を列記するとどまる。

(3)現在までの調査の結果によると、東アジア地域におけるキリスト教会建築（主として聖堂）は、次の三つの類型に大別できると考えられる。すなわち、いずれも仮称であるが、

A：在地形式転用型

B：古典様式ファサード型

C：新動向移植型

の三つである。実は、この他に、D：ロシア正教型というべき一群もあるが、これは全体として数が少なく、かつ点的な分布を示すにすぎないので、ここでは一応調査・分析の対象外とした。以下には、上記した三つの類型について説明を加えておく。

① A：在地形式転用型

これは、キリスト教（主としてカトリック）が東アジア地域に布教または再布教された際に、ヨーロッパにおける教会建築の形式を導入することなく、各国各地における伝統的な宗教建築の形式を転用したものを指す。日本の16世紀において、最初にキリスト教が伝来したとき、西日本の主要都市に建設された教会が、建物としては多く仏教寺院の仏堂の形式を採用し、それに十字架を付加したり、時には開口部をアーチ形にしたりしたことは絵画史料から窺えるが、これと同類のものである。そしてこの場合には、東アジアの宗教建築が多く平入りの長堂形式をとるため、それを妻入りに改める点がほぼ共通するところとなる。

現在のわが国には、このタイプに属する遺構は存在しないが、東アジアの視点で見ると一つの類型として考慮すべきことが明らかになる。すなわち、韓国では現在、おそらくソウル北郊の江華島にある聖公会江華聖堂（1900年）がこのタイプに属する唯一の遺構であろうが、1886年の韓・仏守護条約締結以後に始まった再布教の初期には、いくつ

かの教会において韓国の伝統的な仏堂または祠堂形式を採用した教会が建てられていたことは、既に韓国の研究者が明らかにしている。

中国でも、現存では雲南省大理市の大理天主堂（1921年、未見）が知られるのみであるが、例えば上海市で禁教解除（1846年）後に最初に建設されたという旧・徐家匯天主堂（1851年）は中国的な祠堂もしくは廟建築の形態を採用していたことが古写真から確かめられるように、少し時代を遡れば類例の少なくなかったことが推測される。おそらく情報量の少ない地方を精査すれば、なおいくつかの事例が見出されるのではないかと期待される。

そして中でも、この類型の現存遺構が極めて豊富なのはヴェトナム北部である。著名なファットジェム大聖堂（ヴェトナム人チャン・ロック神父設計、1891年）をはじめ、数十棟に及ぶ類例は近年、首都大学東京の山田幸正教授らによる精力的な調査によって実態が解明されてきたところである。

ヴェトナムの事例が示すように、この類型は布教または再布教の初期的な現象とのみ言うことはできず、地域における建築生産体制の状況（本格的な洋式建築を建設する技術の不備または資材の不足、これに対して在地の伝統技法の成熟度や体制の完備など）や何らかの特殊な事情に応じて、十分起こりうる事が分かる。同時にその場合、単なる転用を超えて、独自の造形を展開させていることも注目されることである。

② B：古典様式ファサード型

イタリアのローマにあるイル・ジェス教会（ヴィニョーラ設計、16世紀後半）は、ジャコモ・デラ・ポルタが完成した上部左右にスクロールを置いた正面意匠が特徴的で、そのファサード・デザインは以降の教会建築とりわけスペインやポルトガルの植民地に建設された教会の範型となったことは広く知られている。その中で、特にイエズス（ジェスイト）会派が手掛けた中南米のものはこの系譜の延長であって、時にその独創性の乏しさからやや蔑まれた意味でジェスイト様式とも呼ばれる。が、ここではそれも含めてより広義に、正面意匠がルネッサンス以降の古典様式に淵源するものを一群として扱うことにする。

まずイル・ジェス型式の典型的な事例としては、16世紀中頃にポルトガルが入植したマカオの聖ラザロ教会（1568年創建、1885年改修）、聖パウロ教会（1630年代）の正面壁遺構、聖ホセ・セミナリオ教会（1758年）、聖ドミンゴ教会（1828年改修）といった古くからの遺構（但しマカオの諸事例は未精査）が現存する。

中国本土では、上海の薫家渡天主堂（聖フ

ランシスコ・ザビエル教会、ジャン・フェランド修道士設計、1853年)、武漢の上海路天主堂(聖若瑟天主堂、1876年?、未見)、北京の南堂(宣武門天主堂、1904年再建)などと、比較的古い時代のものに限られる。

台湾で現存最古の教会である屏東県の萬金天主堂(スペイン人宣教師・郭徳剛設計、1869年再建)は、正面左右に低い鐘塔を置く形式で、開口部は尖頭アーチとするものであるが、低平な本体の構成はこの類型に属するとみることが可能であろう。

さらに、長崎にある大浦天主堂の創建時の正面は、屋根上にゴシック風の中央鐘塔と左右小塔をおくものの、ファサード部分はこの類型に属するとみてよいことは既に指摘されてきたところである。

このタイプと後述する新古典主義の事例とを峻別することは難しい面もあるが、イル・ジェス形式を含む古典様式の範型としての根強さが確認される点で、一群をなすことは疑えない。いずれの遺構も全般に低平で上昇性の乏しい外観を見せ、内部も半円筒ヴォールトまたは台形型の低い天井を基本とするところが共通している。

③ C：新動向移植型

イギリスでのゴシック・リバイバルの始まりは17世紀前半にまで遡るようであるが、教会建築にそれが適用されるのは18世紀の後半からで、そこから19世紀後半にかけての約1世紀がその頂点をなした。新興国のアメリカにも、この動向は次第に伝播したところであった。そしてフランスにおいては、むしろイギリスからの影響下にゴシック・リバイバルが隆盛したため、それは19世紀の前半以降のことであった。しかも特にフランスにあっては、ほぼ同時期にロマネスク・リバイバルも起こっていた。そして一方では、こうした中世の様式を手本とするのではなく、古代ギリシャ・ローマやルネッサンスに範を求めた新古典主義(クラシック・リバイバルとも)もまた、ほぼ並行した動きとして出現していた。

東アジアの諸国においてキリスト教が再布教された時期は、上述した本国での建築動向とほぼ同時期であったため、その新しい傾向を移植することが大きな潮流を形成したといえる。特にゴシック・リバイバルにあっては、フランス人神父が指導したカトリック教会のみならず、イギリスやアメリカのプロテスタント系諸派の場合には、本国の建築家が直接関与した事例も多く、ほとんど時間差のない展開を示す点が特徴的である。

20世紀初頭までに建設された主要な遺構を列挙すれば、ゴシック・リバイバルでは香港の聖約翰教堂(St. John's Cathedral、P. キュービット設計、1849年)、北京市の北堂(西什庫教堂、1888年)や東交民巷天主堂

(聖ミシェル堂、フランス人神父設計、1901年創建、1904年増築)、天津市の天主教望海楼教堂(1869年創建)、上海市の旧・聖三一教堂(現・黄浦区人民政府大礼堂、G. スコット設計、W. ギドナー現場担当、1869年)や天主教若瑟堂(聖ヨセフ天主堂、1869年創建、1877年正面改築)、徐家匯天主堂(イギリス人建築家 W. M. ダウダル設計、1910年)、広州市の廣州石室天主教堂(フランス人技師設計、1888年、未見)、瀋陽市の瀋陽天主教堂(フランス人設計、1912年、未見)、重慶市の若瑟堂(1864年?、未見)などがある。

韓国ではソウルの明洞聖堂(フランス人 G. コスト神父設計、1898年)や葉峴聖堂(中林洞聖堂、G. コスト神父設計、1892年)、貞洞教会(吉沢友太郎設計、1896年)、大邱市の大邱桂山聖堂(A. ロベール神父設計、1902年)、ヴェトナム・ハノイ市のハノイ大聖堂(フランス人ピガニエール司教設計、1888年)などが上げられる。

わが国では、長崎の大浦天主堂(ヒュレ神父設計、1864年創建、1879年増築・プティジャン神父設計か)が他国と比べても早期に属する一例で、五島市の旧五輪教会堂(1881年、国重文)や新上五島町の江袋教会堂(1882年創建、岨指定)などは稚拙かつ小規模ながらそれに続く貴重な遺構と言える。そして平戸市の宝亀教会堂(1898年頃)、鉄川与助が設計施工した長崎県小値賀町の旧野首教会(1908年、岨指定)や新上五島町の青砂ヶ浦天主堂(1910年、国重文)がこれに続く。

もと京都市にあった聖ザビエル天主堂(1890年、現・明治村移築)はむろんのこと、アメリカ聖公会が京都に立てた聖ヨハネ教会(旧日本聖公会京都五条教会、J. M. ガーディナー設計、1907年、現・明治村移築、国重文)もまた、やや変則的ではあるがアメリカン・ゴシックの一変種としてこれに含めてよいであろう。

なお、佐世保市の黒島天主堂(マルマン神父設計、1902年、国重文)や山形県鶴岡市の鶴岡カトリック教会天主堂(パピノ神父設計、1903年、国重文)、さらには鉄川与助が設計施工した福岡県大刀洗町の今村教会堂(1913年、県指定)や平戸市の田平天主堂(1918年、国重文)、あるいは韓国全州市の全州殿洞聖堂(朴ウイドル神父設計、1914年)とか大邱市の大邱桂山聖堂(上掲)、ヴェトナム・ホーチミン市のサイゴン大聖堂(J. フランス人建築家ブラール設計、1880年)などは、一般に半円アーチを使用することをもつてロマネスク様式に分類されることが多いが、これらはいずれもフランス系のカトリックに属し、そして建物の正面側では垂直性が強い中央の単塔か左右の双塔を取り付け、堂内も一部の例外はあるが高いリブ・ヴ

オールト天井を懸けるのを基本とすることからして、むしろゴシック・リバイバルの変容、むしろアジア的な変形態として括る方がよいと思われる。

また、イギリスのヴィクトリアン・ゴシックでは、色違いの煉瓦等を多様に組み合わせる表情豊かで力強い表現を演出するという特徴的な傾向（これは「構造的多彩色」と呼ばれる）がみられた。その代表的事例であるW. バターフィールド設計のオール・セインツ教会（ロンドン）は1859年竣工、同設計のオックスフォード、キープル・カレッジ礼拝堂は1873-75年、ジョージ・エドモンド・ストリート設計のセント・ジェイムズ=ザ=レス教会（ロンドン）は1859-61年であったのに対し、同系列に属するイギリス人建築家G. スコットが設計し、赤煉瓦と黒煉瓦及び石材を併用した上海・旧聖三一教堂（上掲）は1869年というように、まさに同時代的な動向が導入されていた。中国でも教会建設の実績をもつコスト神父が設計した韓国ソウルの明洞聖堂（1898年、上掲）、その流れにある大邱桂山聖堂（1902年、上掲）、鉄川与助が設計施工した新上五島町の大曾教会堂（1916年、県指定）および田平天主堂（1918年、上掲）でも同様な傾向がみられるのは、直接的な証拠は見出されていないが、さらにその影響または伝播とみてよいであろう。

一方、前述のように従来ロマネスク様式として分類されていたものをむしろゴシック・リバイバルの変容とみるならば、ロマネスク・リバイバルの事例はごく限られてくる。天津の西開教堂（1916年）、上海近郊の余山山頂に立つ余山天主堂（ポルトガル人神父設計か、1925年。中腹にも1873年落成した折衷様式の旧・聖堂が残る）、青島の江蘇路基督教堂（青島福音堂、C. ロートゲーゲル設計、1910年、未見）や青島天主教堂（A. フレーベル設計、1934年、未見）、韓国のソウル聖公会聖堂（イギリス人建築家A. ディクソン設計、1920年頃か）や仁川市の仁川沓洞聖堂（仁川聖パウロ聖堂、1937年）などと、比較的時代が新しいものばかりで、かつ教団の組織本部に併設された大規模なものが多い。また、北京の東堂（1905年再建）は、一般に新古典主義と理解されているが、堂内の構成を併せ考えるとむしろこれに含めてよいと思われる。

同様に、新古典主義の系譜に属するものも少なく、マカオの聖ロレンソ教会（1618年創建、1898年改修）や聖アニョスティーノ教会（1874年再建）などと、古くからイエズス会に属する教会が改修される際に適用される程度にとどまっている。すなわち、東アジア地域にあっては、この動向は他の世俗建築に広く受け入れられたこともあってか、教会建築の造形としてはむしろ敬遠されたの

かもしれない。そうした中であって、わが国で最初に建設された横浜天主堂（1862年）は残存するエッチング画からすれば、明らかにこの系譜に属していたことが想起されてよいだろう。また、長崎の大浦天主堂境内と近郊の外海地区で活躍したフランス人ド・ロ神父が設計した建物群、すなわち前述の旧羅典神学校や同じく大浦天主堂境内にある旧長崎大司教館（1915年、県指定）、外海の出津教会堂（1882年創建、1891・1909年増築、国重文）、旧出津救助院授産場（1883年、国重文）、大野教会堂（1893年、国重文）などには、全くゴシック的な要素が見られず、古典主義的造形で一貫していることは改めて注目すべきところであろう。東アジア地域全体から見ても、希有な事例といつてよいからである。

(4)以上のように、東アジア地域におけるキリスト教会建築の様態について、残存する遺構を中心として一応の系譜的な概括を行うことは可能であるが、しかしこれでもってその全容が明らかにしえたわけではもちろんない。そこで最後に、今後に残された課題や展望について整理しておくことにする。

①建築技術的な視点からみると、前記した三つのタイプのうち、まずA：在地形式転用型は、在地の伝統的な技法を採用するのであるから、その地域においてそれを可能とする工人、資材等が確保されるならば、最も容易に実現できるところだといえよう。出来上がった構造体や空間が教会堂としての使用に耐え、宗教空間としても相応の雰囲気保障されている限りにおいてである。しかしこの点は、先に見たように、転用されるのが元来在地の宗教建築であったから、問題は少ないであろう。むしろ逆に、民衆的なレベルからすると慣れ親しんだ側面があり、抵抗感を低減する役割も期待できよう。しかしそれでもキリスト教会であることを印象づけるためには、さらなる工夫が付加されることになることも容易に想像される。十字架を取り付け、開口部をアーチ形にするにとどまらず、ヴェトナムのファットジェム大聖堂にみられるような正面側の独特な荘厳化などは、そのよく考慮された成果だといえよう。

②次に、B：古典様式ファサード型の場合には、石や煉瓦という材料の調達と時には開口部や天井等に用いるアーチ架構の技術が要求されることになるが、これについてはヨーロッパ本国での長い蓄積があるので、宣教師たちがそれに習熟しているか、または石工たちを帯同すれば可能となるに違いない。ましてや、創建時大浦天主堂のように、それを木造で模して建造するのであれば、それほど難しいことではなからう。一定の大工技術や左官技術の水準があれば、簡単なスケッチでも意思の疎通はできようからである。おそら

くここには、イエズス会士らによる試行錯誤の積み重ねがあったかと推量される。

③ これらに比較して、C：新動向移植型の主流をなすゴシック・リバイバルにあつては、堂内の天井をリブ・ヴォールト形式で造らねばならない点で、一層の困難さが随伴したのでないかと想像される。本国で石造や煉瓦造のゴシック・リバイバルに精通していた建築家が直接担当するのであればまだしも、近代のふつうの宣教師たちがそうした技術を十分に修得していたか疑わしいからである。そしてこの点について、その技術伝達は具体的にどう達成されたのか、これを証明する資料もほとんど得られてはいない。この点が未解決な問題として残されている。

④ また、わが国に支配的な木造によるリブ・ヴォールト天井は、現実にはどのようにして導入しえたのか、この点についてもその詳しい経緯は未だ解明されていない。

たしかに、その早い事例は、イギリスのグロスターシャー地方にあるテトベリー教会において1777-1781年頃に達成されていたことがつとに指摘されており、また舟底形の板張り天井については中世以来の伝統があったことが、フランスのノルマンディー地方やオランダの事例などから知ることができる。しかしわが国の大浦天主堂は、おそらく東アジア地域における木造のリブ・ヴォールト天井を実現した最初期の事例とみられるが、従来知られる資料からはこの間の経緯を推察するに足る情報は一つ得られていない。また、フランス人神父たちが過ごしたパリ市内やその周辺部には、石造のゴシック・リバイバルはあつても木造のそれは皆無に近いのではないか。わずかに、新しい材料である鋳鉄を用いたリブ・ヴォールト構造が、サン・トゥージュヌ教会（ルイ・オーギュスト・ボワロー設計、1855年）などにおいて、実現されているのみであった。

すなわちここには、キリスト教会建築の基本的な構築技術に関わる問題が残されているのであり、しかもそれは決して見掛けほど単純ではなからうと考えられるのである。今後、さらに追及すべき研究課題としたい。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計5件)

- ① 林 一馬、伊勢神宮の式年遷宮制、地域論叢（長崎総合科学大学地域科学研究所紀要）、No. 28、査読無、2013、63-76頁
- ② 林 一馬、長崎の教会堂—遺産の神髄、週刊日本の世界遺産（朝日新聞出版）、第25号、査読無、2012、6-9頁

③ 林 一馬、新上五島町の伊藤家住宅、地域論叢（長崎総合科学大学地域科学研究所紀要）、No. 27、査読無、2012、7-15頁

④ 林 一馬、港市・長崎の形成と展開、建築雑誌（日本建築学会）、vol.127 no.1635、査読無、2012、24-25頁、

⑤ 林 一馬、国宝・大浦天主堂の創建当初形態とその建築的痕跡、日本建築学会研究報告九州支部、第50巻・3、査読無、2011、557-560頁

[学会発表] (計3件)

① 林 一馬、神宮の式年遷宮制、神道宗教学会平成24年度大会学術シンポジウム基調講演、2012年12月1日、國學院大學

② 林 一馬、国宝・大浦天主堂の創建当初形態とその建築的痕跡、日本建築学会九州支部研究報告会、2011年3月6日

③ 林 一馬、稲垣建築史学の特質—建築史研究の方法論的吟味に向けて、日本建築学会大会学術講演会、2011年8月25日、早稲田大学

[図書] (計3件)

① 林 一馬・川上 秀人ほか、「長崎の教会群とキリスト教関連遺産」構成資産候補建造物調査報告書資料編、長崎県世界遺産登録推進室、2012、共著、1-1~67頁

② 林 一馬ほか、LIXIL出版、鉄川与助の教会建築、2012、共著、58-61頁

③ 川上 秀人・林 一馬ほか、「長崎の教会群とキリスト教関連遺産」構成資産候補建造物調査報告書、長崎県世界遺産登録推進室、2011、共著、3-1~48頁

6. 研究組織

(1) 研究代表者

林 一馬 (HASYASHI KAZUMA)

長崎総合科学大学・環境・建築学部・教授
研究者番号：80086420

(2) 研究分担者

なし

(3) 連携研究者

なし